

大麻文化科学考

(その2)

山本郁男*

A Study on the Culture and Sciences
of the Cannabis and Marihuana. II

Ikuro Yamamoto*

Received October 21, 1991

第2章 大麻の文化

第4節 続、我が国の大麻—大麻と苧麻

「女が嫁にゆくには、縫いもの、飯仕度、麻かき。その三つはどうしても名人にならなければなんね」が母の口癖だった。「つましい夕食後の長い夜なべ。夏場は農具のつくろいや蚕の仕事。そして冬は麻のより合せ」。これは長野県上水内郡小川村に住む今年68才の老女の述懐である¹⁾。このように大麻は、老女が語るように信州、北陸、越後など、つい最近まで、我々の身近にあったのである。かつて長野、石川、新潟、福島、栃木、茨城、千葉などは大麻の産地県であった。

前報²⁾に引続き、古代、中世、近世、近代の我が国の大麻について再考してみることにする。

前節²⁾でも若干触れたように、古代、中世の民衆の衣生活を語る時、大麻を除外する訳にはいかない。そこには大麻とは明記されていないが、その求める文献の最初は、やはり魏志倭人伝³⁾であろう。「禾稻・苧麻を植え、蚕桑緝績して、細苧縑繅を出す」。すなわち、「稲や苧麻を植え、養蚕を行って絲をつくり、布や縑綿をつくっている」という意である。一方、范曄(～445年)の『後漢書』、「第115東夷伝倭」には「土は禾稻、麻苧・蠶桑に宜しく、織績を知り、縑布を為る」とある⁴⁾。ここでは、倭人伝の苧麻が麻苧と逆転していることが注目される。このことから、著者は、後述するように、これは麻と苧とを分離して考えるべきであると思っている。従って、古代の倭の衣生活は大麻と苧麻が主要な原料であったのではなからうか。そして時代は下り、奈良・平安時代と中世に向けて移るのであるが、以下に麻の歌のいくつかを前報に引き続き掲げることとする。

*薬学部衛生化学教室

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Department of Hygienic Chemistry.



Fig-1 大麻種子 (THCA種), 播種10日後 (高さ約4.5cm) (著者画く)

庭に立つ麻手刈り干し布さらす
東女を忘れたまふな 常陸娘子 (万葉集4-521)

桜麻の苧原の下草 露しあれば
明かしてい行け 母は知るとも (万葉集11-2687)

小垣田の麻を引き干し妹なねず
作り着せけむ 白栲の紐をも
解かず一重結ぶ (万葉集1-800)

麻苧らを麻笥に多に績まずとも
明日着せさめせ いざせむ床に (万葉集1-3484)

庭に立つ麻手小衾今宵だに夫寄し来せね
麻手小衾 (東歌)

少女らが績麻の絡塚打麻懸け
績む時なしに恋ひ渡るかも (万葉集1-2990)

枕詞には「麻^{あさま}裳よし」とか「夏^{なつ}麻引く」などがある。また桜^{さくら}麻は雄の大麻の枕詞とされている。

古代から中世。集権的な国家体制の形成プロセスにおいて、租、庸、調の税制が確立されると、その中に、北陸、東国の麻布（以下、単に布と呼ばれる）と絹と綿（木綿はこの時代にはまだなく全て蚕^{まゆ}の繭からとる真綿であった）が主要な位置を占めていた。「布」は現代のように一般的な織物をさすのではなく、絹や綿とは明確に区別された麻織物のことであった。別名、軽くて、運ぶに便利のため「軽物」とも呼ばれたらしい。粗^{あら}織りの「布」は、今日、奈良正倉院の御物の中に実在する。

今年行く新島守が麻衣 肩の紐は

誰か取り見む

（万葉集1-2481）

打^{うち}麻を麻績^をの王^{おおきみ} 海人^{あま}なれや

伊良^い良^ら真^まの島の玉藻刈ります

（万葉集1-341）

ところで、先の万葉集4-521に出てくる律令国家時代の麻を栽培していた東女の住む国はどこを指すのであろうか。これは常^{ひたち}陸が現在の茨城県であると考えれば関東、東北、これに北陸が含まれると思われる。北陸とは越前、加賀、能登、越中、それに越後、信濃なども入るのではないか。だからといって麻の栽培が東方に限られていたとはいえない。文献的にみると平安時代以降の中世荘園制時代には随所に麻の栽培の記録があった。丹波の大山荘、肥後の人吉荘南坂梨郷、伊勢の大園荘、越前の牛原荘、若狭の太良荘など、それぞれ「在家^{さいりき}亭」として在家から麻布を徴していた。「在家」とは家屋、人、田畠をふくめた課役の収取単位であった⁶⁾。『延喜式』に、麻布は調、庸、中男作物として全国的に賦課されていたことが記されているので、大麻の栽培は日本列島いたるところでなされていたとみてよい。大麻の栽培に適した、北陸、東北は特に力が入られていたことは確かである。また、この地方は荘園制度支配と収取が衰退するに及んで麻は特産品として注目された。越後上布、能登上布、奈良晒、高富細布、小千谷縮や近江八幡の蚊帳の名が近世まで残っていることから、これらの地は一大、麻織物産地であった。すなわち、網^{あみ}亭、畳^{たたみ}亭、筆^{ふで}結^{むす}亭などの需要が増加したことから窺い知ることが出来る。当時の生産高をみると、信濃商布6450端（=反）、上野7731端、下野7003端、越後1000端、越中12000端、加賀、能登1500端、越前1000端とある。

ここで著者は再び、大麻と苧^{とう}麻との区別についての見解を明確にしておかねばならない。というのは、はたして我が国では単に麻といった場合、それは苧麻（からむし）であるという意見が少なくないからである⁶⁾。

事実、広義の麻の当字として、大麻、苧麻、紵^{しよ}麻、麻紵^{あましよ}がしばしば引用され、これが混乱の原因となっている。著者が一番知りたいことは、現在『大麻取締法』の対象となっている幻覚作用を有する真の「大麻」は古代日本から近世まで、吸煙の風習がないものの、本当に栽培されていたのだろうかという疑問である。

大麻は中国において、『詩経』では単に「麻」と書かれ、『事物起原』には「漢麻」とわざわざ漢という字をつけている。『日用本草』には「火麻」、『本草綱目』には「黄麻」、『救荒本草』には「山糸苗」、『神農本草経集』には「大麻」とあるなどなお複雑である⁹⁾。

この複雑さの因を宋代、沈括著の『夢溪筆談』に求めると、こう記している。「張騫は夫蘭国より初めて油麻の種子を入手した。これを麻と呼ぶものがいたので、新しく胡麻（外国あるいは異国のあさ）とし、従来の「麻」を「漢大麻」すなわち「漢麻」または「大麻」と命名した」とある。さらに大麻は前報にも記したように雌雄異株であり、中国では雄株（実のならないもの）を枲麻あるいは牡麻、雌株（実のなるもの）を苧麻と呼んだことが苧麻と混同されるようになったのではないかと著者は考えている。

永原慶二著⁶⁾（新・木綿以前のこと—苧麻から木綿へ・中公新書）の14頁には「苧麻の葉と刈り取り」（藤森武氏撮影）とあるが、2人の農夫が手にしているのは、よくみるとこれは苧麻ではなく、明らかに大麻である。それは葉の形から判別できる。大麻は3～9裂の掌状複葉であり、苧麻は卵型をしている（Fig 2・3）。

こういうことから魏志倭人伝の紵は苧と簡単に書きかえてよいものかという疑問が残る。

『麻葉の科学』の著者⁴⁾、一戸良行氏によれば「古代から江戸までは大麻と苧麻。明治以降は大麻と亜麻が対比される。」という。

これに関して、著者は最近、石川県立図書館の古文書の中

に重要な絵図資料を発見した¹⁰⁾。それは江戸時代に画かれた「民家検労図」という全2冊の彩色入りの図である。その原本から直接写ったものがFig-4及び5である。図からも分かるように、麻とかかれているFig-4は明らかに大麻であり、Fig-5は麻苧（からむしと云う）すなわち苧麻である。大麻を一字の麻と書き、しかも「皮をこそげ取り竹竿にかけてほす也。是を苧を引と云」とある。

この文献から少くとも断言できることは、この図が画かれた江戸時代、加賀、能登には2種の繊維作物が栽培されていたということであろう。

関連して、さらに『和名抄』には「苧、麻属、白而細者也」とある。また、既述の『日本書紀』には「天下をして、桑、紵、梨、栗、蕪菁等の草木を勧め植えしむ」（持統女帝693年頃）と書かれており、苧と紵はやはり完全に違うのである。前者が大麻、後者が苧麻ということか（？）現在、紵（イラクサ科）を栽培しているのは福島（昭和村）、新潟、沖縄（宮古、石垣、竹富、小浜）に限られている。

では、近世まで「布」はどのような原料から作られたのか。広義の布とは、葛、藤、楮、麻、カラムシ（苧麻）などの植物質繊維で織ったものの総称であった。沖縄では「生苧麻布」とい

Fig-2 大麻⁹⁾Fig-3 苧麻⁹⁾

い、本土では上布^{じょうふ}といった。これが『能登上布』などの言葉として現在に残っているものと考えられる。

永原慶二氏⁶⁾は「倭錦・絳青縑・緜衣・帛布等を倭王は魏に贈っている。これらの織物の各々の性質は不明であるが、やはり絹と麻を原料としたものであろう」と述べているに過ぎない。「しかし、この時代の主力は苧麻であったようである」として表現は極めて曖昧である。村上直太郎著⁹⁾『着物・染と織の文化』から引用すれば「麻も倭人がもってきたといわれています。彼らもってきた麻は中央アジアか南アジア生まれ。…中略。倭人伝に麻を栽培し、麻織物を織っている、というのは、この麻でしょう。」とある。すなわち、中央アジア原産ならば大麻を指しているともいえるのではないか。

著者の推測では、在来種の繊維作物は苧麻（からむし）、勿論、植物として的大麻はあったのであるが、ここに漢麻といわれる繊維作物としての「大麻」が持込まれたとみるべきである

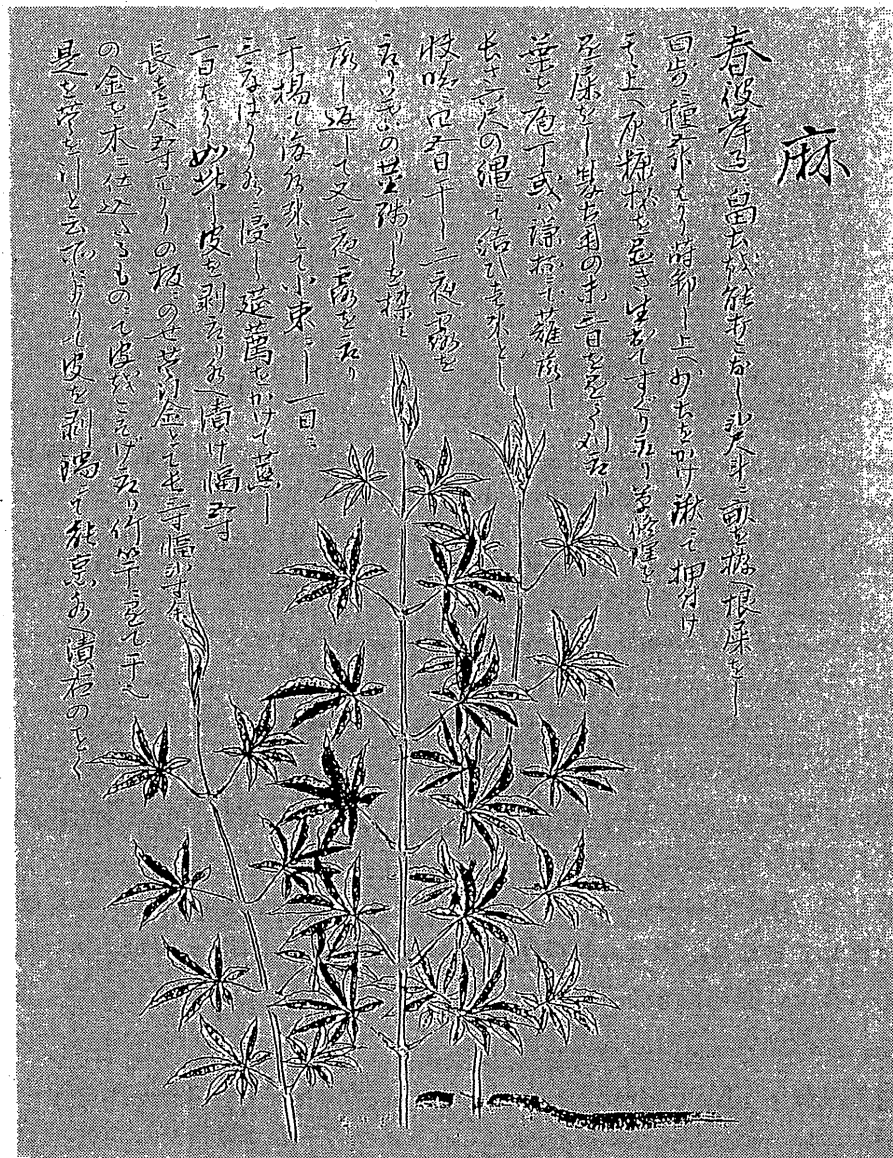


Fig-4 江戸時代の大麻
(石川県立図書館蔵『民家検労図』より)¹⁰⁾

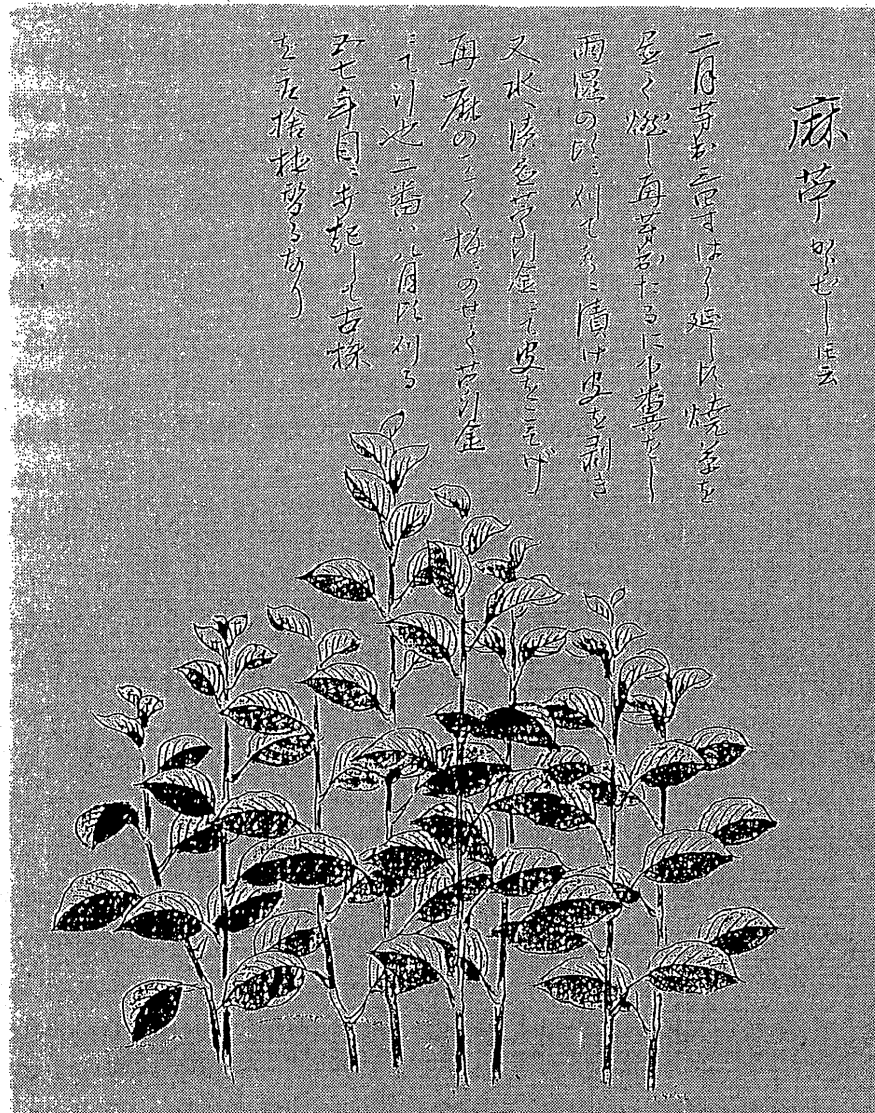


Fig-5 江戸時代の苧麻
(石川県立図書館蔵『民家検労図』より)¹⁰⁾

う。中国大陸にすでにあった大麻からの織物ではさして珍しくはない。異国のからむしから作った布であってこそ初めて、贈物として価値があったのではないか。

これに関連して、外来のものをアオソ（麻）であり、国産のものをカラムシであるとの説もあることを付言しておこう。カラムシの手織の布はサヨミ（賃布）と呼び、調（税）として中央政府に集められた。興味あることに隣の韓国ではカラムシのことを「苧布草」という。朝鮮半島における大麻の歴史はぜひとも今後研究の対象としなくてはならない事項である。

人類は土器よりも早く糸＝絲＝繊維を作り、やがて身にまとう布（織）を衣とした。その原料として大麻が用いられたが、既に再三述べているように大麻は薬物としても貴重なものであった。

ここで前報で記さなかった大麻の歴史を一覧表としてTable Iに掲げる¹²⁾。

Table I 大麻の歴史

年代	地域	内容	出典
B.C.7000~10000	中央アジア	大麻の起源地, 野生大麻の栽培	
5000	エジプト	ファイユーム遺跡から麻布と種子	
	チグリス	発見。繊維, 薬物として使用 (?)	
	ユーフラテス		
3000	エジプト	ゲルゼ出土品麻布発見 薬物とし	
	チグリス	での使用 (?)	
	ユーフラテス		
1400~900	インド	魔術師が戦術に用いた	アザルバ・ベータ
1200	中国	大麻の幻覚作用の記事	エル・ヤ
1000	インド	大麻は多幸感を生じさせる	サスルタ (インドの古書)
	日本	大麻, 大陸から持ち込まれる	
800	トルコ	アンカラの古墳から大麻出土	
800~500	中近東	回教の宗教儀式に用いられる	
650	アッシリア	楔形文字板に大麻の記載	
500	ゲルマン	墳墓から麻の種子, 死者を天国に 導くためと考えられる	
	イラン	大麻は幸福の源である	ゾロアスター經典「ゼンドアベスタ」
	インド	大麻樹脂, 花穂の記載	バラモン經典ヴェーダ
	中国	大麻という名の最初	書経
484	カスピ海沿岸	大麻を赤熱した石の上で焙りその 蒸気を吸い歓喜に酔いしれた	スキタイ文化, ヘロドトス (古代ギリシアの歴史家)
450	ギリシア	スキタイ人の大麻吸飲の風習	ギリシア文学の中に初めて既述
100	イラン	土着宗教の神官 (アギ) の間で大 麻を用い荒行, 幻術を行った。宗 教的秘事に用いた	
A.D. 70	ローマ	ネロ皇帝の主治医ダアイ・オコリ ディーズは大麻を初めて薬物とし て使用。併せて使用方法も残す	
	日本	千葉県銚子市余山貝塚大麻の実の 出土	
100		大麻は耳痛に有効	プリニウス (博物学者)
175	ギリシア	大麻は屁を止める	ガレン (医師)
220	中国	大麻と松樹脂と酒の混合液を手術 用麻酔剤として利用	
200~250	中国	麻沸散 (大麻を配剤)	華佗伝 (医者) (三国時代)
400	ドイツ	大麻の栽培始まる	

年 代	地 域	内 容	出 典
A.D. 500	イギリス インド	大麻の栽培と使用方法がインドから西方ペルシア, アラブ諸国へと次第に広まる	
512	中 国	大麻には繊維用と種子油用の栽培 大麻の図, 最古の図版	齊民要術 写本「アニシア・ジュリアーナ」 ダアイ・オコリディーズ
754	日 本	鑑真和上薬物持参	
712	日 本	日本における麻栽培の最初の記事	「常陸風土記」
807	日 本	麻の記載 正倉院に麻布あり「薬種献物帖60種」 麻汁による幻覚による中毒死	「古語拾遺」 麻の歌「万葉集」 「播磨風土記」
900	ア ラ ブ 地中海沿岸	大麻を麻酔剤として活用	
1000~1500	イスラム教圏	大麻は素晴らしいもの, この頃読物, 詩歌にしばしば登場する	「千夜一夜物語」
1000年頃	ペルシア	土民の暗殺団 (Hashshâshin), 大麻を飲んで白人を殺害	
1200	中央アフリカ	大麻を燃し, その煙を吸い陶酔作用を楽しむ	
1320	エチオピア	大麻吸煙器具として水キセルが初めて使われた	
1300~1500	ヨーロッパ	アフリカ, アジアを通過したヨーロッパ人が故国に大麻の繊維以外の利用法を伝承	
1530~1540	チリ	スペイン人が大麻を南米チリーに持込む	
1500年代中頃		大麻の植物学; 幻覚作用を記す	フランソワ・ラブレー著 「パンタグルエル」
1606	カナダ	ヘベルト (薬剤師) が大麻を栽培	
1726	日 本	大麻は毒がある, 大麻は狂う草	用薬順知 (医学書) 古今要覧
1753	スウェーデン	<i>Cannabis sativa L</i> に分類	リンネ
1783		<i>Cannabis sativa indica</i> の分類	ラマルク
1798	エジプト	ナポレオン, 大麻入りの酒及び喫煙をエジプト遠征中の兵士に禁ず	
1800	ヨーロッパ	大麻がナポレオン軍によりヨーロッパに流布された	

年 代	地 域	内 容	出 典
A.D.1809	ヨーロッパ	暗殺という言葉はハシッシュの常用者という説	シルベストル・デ・サシー
1839	エジプト	オシヨネシー (カルカッタの科学者) が大麻を西洋医学会に紹介, 疲労, リューマチ, 喘息, 偏頭痛の治療	
1840	北アフリカ	大麻の樹脂はチフスや疫病に効果あり	ロシェ (医師)
1840年代	フランス	大麻により私は全くの幸福感を味わった (Moreau 自身の体験記)	ジャック・モロー・ディトゥア (パリーの精神医学者)
1844	フランス	大麻クラブ誕生, 月に1回会合を開き大麻入りの菓子を食べる	ゴージェ, バルザック, ボードレール, デュマ, ユーゴ
1845	フランス	大麻の娯楽的効果を記述	「モンテ・クリスト伯」デュマ著
1854	アメリカ	大麻吸飲体験記	ベイヤード・ライラー (作家)
1857	ニューヨーク	「大麻食用者」ドラック文学の最初	フィッツ・ヒュー・ルドルフ (アメリカの作家)
1800	アメリカ	アメリカの製薬会社大麻の薬剤を製造	
1880年代	アメリカ	アメリカ各地に秘密の大麻クラブが結成	
1889	イギリス	麻薬中毒患者の治療に初めて大麻を用いた	エドワード・バーチ (イギリスの医師)
1890	イギリス	大麻は特に偏頭痛に著効	レイノルド (ビクトリア女王の主治医)
1894	イギリス	この頃東インドより大麻輸入	インド大麻調査委員会報告書
1898	メキシコ	大麻が流行	
1906	アメリカ	食品や薬物中の大麻の明示を法的に義務づけた	純粋食品および薬物法
1910~30	メキシコ 西インド諸島	大麻吸煙の風習広まる	
1924	ソ 連	大麻草の形態学的一変種 <i>Cannabis ruderalis</i> の分類	ジャニチュフスキー
1925		大麻の取締規定	国際アヘン条約 (ジュネーブ)
1929	アメリカ	アメリカ16州で大麻禁止	
1934	ニューヨーク	大麻吸飲体験記	ウォルター・ブロムベルグ
1940年代	アメリカ	カンナビジオールをテトラヒドロカンナビノールに化学的に変換	ロージャ・アダムス

年代	地域	内容	出典
A.D.1942	アメリカ	アヘン中毒者の治療に大麻を使用	アレントック・ボーマン
1947	日本	「大麻取締法規則」制定	
1961		大麻が国際的規制をうける	国連麻薬委員会
1964	イスラエル	大麻の有効成分（催幻覚）はテトラヒドロカンナビノールである	メコーラム
1960年代	アメリカ	ベトナム戦争でアメリカ兵に大麻などドラッグが流行, 常飲者2600万人	
1968		大麻の管理の強化を呼びかける	ユネスコ
1969		大麻は人体に対する依存性の恐れはないが精神的依存性は強いので法律で取締ること	世界保健機構
1973	コロンビア	大麻成育地山谷50マイルを焼く	
1975	アメリカ	制癌剤投与をうけているガン患者の吐き気を止める作用及び鎮痛作用, 緑内障の治療薬への応用	
1977	日本	大麻によるラットの異常行動	植木昭和, 他「科学」
1980年代	日本	大麻乱用が激化	
1984	日本	ロス五輪選手大麻持込み。	
1984		kg単位の密輸入が顕著	
1984~	アメリカ	1960~70年代の薬物礼賛の風潮を政府がおさえる方向に変更	
1986	インドネシア	世界麻薬追放宣言	
	アメリカ	大麻（マリファナ）撲滅運動	ナンシー・レーガン
	日本	大麻成分の代謝的活性化（毒性増大）	山本郁男, 他「薬学雑誌」
1990	日本	市販大麻種子中に THC を確認	山本郁男, 他「衛生化学」

今、著者は大麻の文化について書き進めてはいるが、ピエール・チュイリエは科学は文化の一部である、科学が文化を支えるもの、あるいは単なる技術としてではなく、文化の「一部」としてとらえるべきであると指摘する。(その1)²⁾の冒頭にもかいたように、大麻はまさしく文化の一部として科学的に把えなくてはならないものであろう。年表の1つ1つを取り上げて説明する紙面をもたないが、大麻こそは「反=科学史」で知られるチュイリエに絶好の材料を提供しているかも知れない。何故なら、科学が、ある時代の社会文化状況を反映しながらも、時にはその中で遅滞し、逡巡つつ、まぎれもなく文化を形成しているからである。では現在の大麻乱用の風潮ははたして科学なのか。文化なのか。という命題が著者の心の中に^{こだま} 響する。

そもそも近代科学は16C初頭、錬金術の相反の関係の中で誕生した。「科学は常にリアリティーといかがわしさを持ち、その両方を兼備しているがゆえに危険なほど魅惑的である。科学は時代の欲望を体言している」(チュイリエ)。ひるがえって、「地球環境や生態系の破壊、麻薬へ

の恐威等が特に関心をもたれている現在こそ総合的な判断力が必要とされるのであろう。この模索は今始まったばかりである。少なくとも大麻に関しては…」。

ことほどさように、人類は誕生以来、アダムとイブの神話をひきだすまでもなく、個人は家族となり、親族をつくり、部落、村、小国家を形成した。その中で、食し、住み、身にまとう衣をつくり出した。そして拡散と移住を繰り返しながら、この五大陸のいづこにも住み、定着。と同時に様々な文化を醸成し、それを持ちはこんだ。そしてその文化は時には(この時こそ科学=技術)有効な人類融合の手段(交易品(=技術の集合体))ともなったのである。当然のことながらそこで、大麻を衣とただけではなく薬物として利用するという事はより魅惑的であった。そこに別の文化が生まれたともいえる。

B.C.1000年。中央アジアから5000年以上という気が遠くなるような時間を経て、いろんな海流に乗って、渡ってきた日本民族の特に北方からの祖先が持ちこんだのは毛皮や麦と共に大麻の種子だった。それは繊維を得るためのものであった。あるいは可能性は少ないが、渡り鳥が大陸から、その胃袋に種子として運んできたかも知れぬ。

いずれにせよ、現在、「大麻」は栃木県を中心に細々と栽培されているのである。「大麻取締法という法律の規制下において…」。

そういう意味で、大麻は科学性の乏しい状況の中で、その繊維としての文化的意義は、少なくとも我が国では消されつつある。その原因として麻薬性があまりにも強調された結果であるが故に疑問さえ残る。けしの有効成分、モルヒネが現在でもなお人類にとって最良の唯一の鎮痛薬として「ガン末期の患者」にとって必要かくべからざるものであることと対比して考える時、文化の中の科学の重要性がいまだ大麻にはないと言わねばならない。

第5節 北陸の大麻

ここで貴重な北陸地方における大麻に関する資料¹⁴⁻¹⁶⁾を紹介する。

江戸時代の北陸における農業以外の収入源は苧^{おかせ}の生産であった(鹿島町史p.368)。苧とは麻(すなわち前頁に述べた大麻のこと)のことで、その繊維を裂いて、よりをかけ(これを苧^{おかせ}を績むという) Fig-6。糸に仕立てたものが苧^{おかせ}である。麻織物は、この苧^{おかせ}を原料とする。これまで農民の衣料として自給自足されていた苧^{おかせ}が商品としての価値をもって来たのは、正徳3年(1713年)羽咋郡子浦村の彦九郎が問屋を開業してからとされる。この能登の上質の苧^{おかせ}を近江商人が多量に買付けに来たからである。当時、能登国の鹿島郡、羽咋郡は口郡(これに対して奥郡^{おくごおり}は鳳至郡・珠洲郡をさす)と呼ばれ、麻の一大生産地であった。この原料は近江風花紋(近江産の麻織物のことで花模様を織り込んだ特産品)となった。その後、文化11年(1814年)能登部の十村与三右衛門は近江商人から資金を得て、新しい麻織物を生み出した。これが既述の能登上布(能登縮)であった。縮を織る技術は近江から習い、徳丸村の権右衛門が藩の奨励を受け生産にあたった。文政4年(1831年)にはその生産高は24,287反に達し、夏の着物として全国的に販布された。徳丸縮^{チヂミ}、阿部屋晒^{サラシ}(羽咋の阿部屋村の海岸で晒したことからこの名がある)ともいう。

清水隆久著¹⁶⁾、「近世北陸農業史」-加賀藩農書の研究-によれば、麻は当時(18世紀)、大量



Fig-6 木綿かな曳く図・苧うむ図
(石川県立図書館所蔵『民家検労図』より)¹⁴⁾

施用量が最も多かった作物が麻であったと記されている。すなわち、麻栽培には基肥えとして300歩1反に鯛の粉3石2、3斗を1番こなしの時に入れ、2番こなしの時に、小便20荷、灰10俵を施し、成長がよくない場合は、さらに追肥として鯛の粉5～8斗、小便なら5～10荷を施せといった具合に、育種法についても詳細に既述している。また「土ヨキ所ヲ遠方ナリトモ受畠シテ作りタル方得分アリ」ともあり、(農事遺書、加賀江沼郡)、大麻栽培の経済性や栽培法を綿密に記録している。

繰り返すが18世紀の初頭、加、越、能、三州は大麻の近世における一大供給地であったのである。

著者は加賀藩の豊潤な文化は、すなわち加賀百万石の資金源は米や塩のみでなく、この麻にも大きな依存があったと見ている。

『加賀志徴』によれば、麻苧の名産地として、示野、赤土、観音堂、鷺森、篠場、桜田、高畠、黒田等、石川郡の里方8ヶ村が挙げられている。口郡における苧紬の生産高は何んと諸物産中第一位(安永7年(1778年))であった。『羽咋、鹿嶋両御郡諸産物之様子書上申帖』(金沢市立図書館加越能文庫)によれば、はっきりと麻と書かれ、その生産は210箇(1箇は約14貫)と

かつ広範囲に動く代表的商品であり、衣料原料だけでなく漁網、あるいは蚊帳の原料として取引の対象であったという。加賀藩においては、麻織物のことを「上布」と呼び、中でも能登上布は品質が良く高く評価されて、鹿島郡能登部村(余喜、鹿島、千路)を中心として生産された。また、元禄時代には羽咋、鹿島郡50余か村に及び、婦女子の冬期によい賃仕事(内職)であった。これは本報の冒頭に引用した長野の老女の話とよく符合する。これらの村々では冬、雪の中でトントンという上布を織るイザリバタのさえた音が聞こえたという。北陸地方の大麻栽培は商品作物として注目され、盛んであったということが推測される。このことから北陸を代表する農書の一つ『耕稼春秋』土屋又三郎著¹⁵⁾—宝永4年(1707)には、加賀、石川郡において畑作に用いる干鯛等の金肥の中で

して収役金は代銀13貫で当時木綿の約2倍であったという。芥川村兵助組、能登部下村兵右衛門跡組、荻谷村平右衛門組、三階村五左衛門組、高田村助四郎組、武部村端左衛門組といった組単位による生産の競争が考えられて興味深い。先にあげた加賀藩の腰の入れ方が窺い知れる。

ここで貴重な記録を引用したい。先の『羽咋、鹿嶋両御諸産物之様子書申帖』中に、原料となる苧について「口郡における苧の生産高は3700貫目程で、からむし(苧麻のこと)の苧はいたって少なく、大部分は麻(大麻をさす)の苧である…」とあり、先に述べて来た、麻と苧麻との区別が明確となり、北陸地方(他の地方も同じとみてよいであろう)は大麻が主であったと結論される¹⁰⁾。天保年間(1830年頃)の従事者数は15000人、生産高の8割が西ノ庄と東ノ庄であった。余談であるが、「在々百姓頭振妻子・後家、^{つゆめ}嬢、女童に至迄…」が冬の農閑期に麻布織りに精を出したのであるが、その賃金は一日働いて米五合にしかならなかったという。ここでも藩を支えていたのは零細な農民、婦女子であった訳である。

苧の生産構造に言及すると、各農家で生産された苧を小買人が集荷するのであるが、小買人の数が口郡全体で125人。村ごとの人数分布はFig-7の通りである。鹿島町地域では在江(1)、武部(4)、二宮(3)、徳前(4)、井田(1)、小竹(2)、水白(2)、東馬場(3)、久江(5)、小田中(4)、藤井(2)、福田(2)、高畠(5)、小金森(1)と合計39人を数え、これは全小買人の3割強(31.2%)にあたる。この集められた苧は紮問屋をへてその殆どが前述のように近江商人に売り渡された。この紮問屋のことを紮中買旅人(近江商人のこと)、宿問屋・紮買宿・紮荷宿とも呼び文化7年(1810年)には13人。文政9年(1826年)には20人。天保6年(1835年)には13人がいたという。文政9年の『口郡紮方仕法ノ件』金沢市立図書館蔵(余談であるが加賀藩が天下の書府といわれる由故がわかる)によれば、これらの人物として高畠村惣右衛門、甚右衛門、与左衛門、忠兵衛、藤井村喜九衛門、小田中村清次郎、茂十郎、徳前村吉兵衛、二宮村藤蔵、久乃木村文左衛門、芹

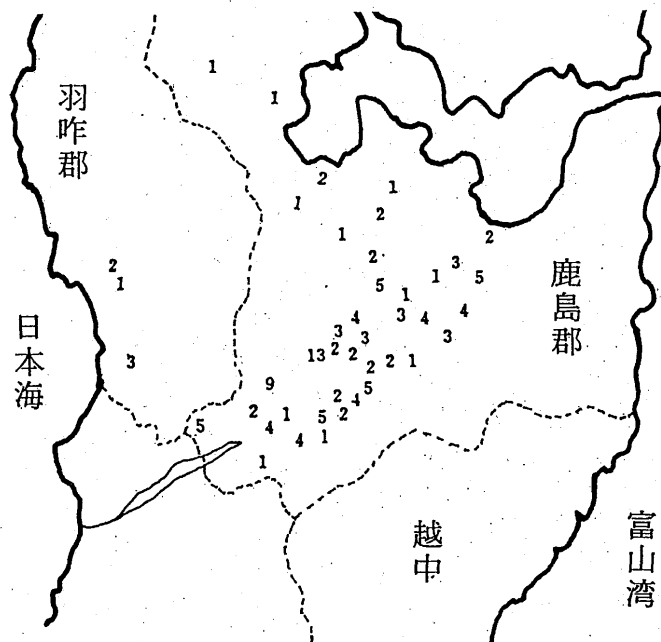


Fig-7 天保四年の口郡苧紮小買人の分布状況

川村与三兵衛の11名の名がみえる。

販売ルートは、近江商人↔紮問屋↔小買人↔生産者(紮師=多くは女性)。自治紮問屋は近江商人からの前貸銀(仕込銀)を小買人に貸し付け、苧を買い集めるので、いずれも村の財力のあるものが従事していた。前貸的支配下では当然のことながら搾取がおこなわれ加賀商人の沈滞が続くことになる。ここでは著者の専門以外なので他にゆずることにするが、若し、加賀地方にこの麻の生産と販売を一手に行いえる資本力と知恵があったのなら近代における加賀藩の動きもまた変わっていたかも知れぬ。しかし、高畠村源左衛門は1830~1846年にかけて、上

州より繕り堅く、上質である麻苧を買入れて上質の布を生産させようとした記録がある。当時、加賀藩にあって質屋、紮屋、苧紮商を一手に営む豪商であった。1813年文化十年、凶作による

御貸米不足に対する口郡地区では激しい一揆が続発している。また、近江商人からの脱脚で生まれたものに能登部土村の土村与三右衛門の発案により手代の徳丸村権左衛門が中心となって生産されたのが「徳丸縮」であった。

しかし、繊維流通経済の浮沈はこの時代も同じであり、苦難の時代を経て明治に入ったのである。特に徳丸縮の生産は元治元年（1864年）明治維新の直前、現在の金沢市尾張町に徳丸村藤吉が出店し、加賀藩に1000両の無償融資を願いでている。また、真館与四郎が社長となって「能登製布会社」を設立、能登上布の改善・生産を行っている、など北陸の麻布をめぐる話題はつきない。

明治11年（1879年）の生産従事者は鹿島町地域だけでも1000名に達し、(Table- II) 羽咋郡を入れると実に73ヶ村、2,313名。特に、東馬場（117戸）、最勝講（36戸）、尾崎（43戸）、小竹（160戸）、水白（68戸）であるから能登半島一帯に麻畠があった筈である。大正七年（1918年）鹿西町、鳥屋町、鹿島町の女性で麻布を織らないものはいなかったという。生産高14万3千反。これが昭和初年には25万8千反、出機数9300台、150業者と全国第一位となった。

つまり、北陸地方は麻布の有名産地であったわけである。

しかし、

「辛苦つくして糸取りなろうて
夜なべしまいを
まつわいの」という仕事歌

「七つ八つから糸取りなろうて
はたをしましように

ひがやり機を」という機織り歌には、麻畠の一種独特の香（匂い）りとは別の、一沫の哀愁が漂っている。

俗説にある「麻と蕎麦の生えるところ、いずれ文化はつる処」とは、逆説的に表題の文化を支えているとみるべきであろう。と同時に、麻糸の強靱さと同じような北陸人の足腰の強さを知る。

Table- II 明治十一年の徳丸縮の生産者数

村名	生産者数	村名	生産者数
曾 祢	22 名	井 田	85 名
東馬場	75	尾 崎	36
最勝講	30	小 竹	98
在 江	8	水 白	42
西	6	久 江	115
坪 川	8	藤 井	25
久乃木	25	小田中	70
武 部	70	福 田	11
二 宮	44	高 畠	82
徳 前	85	小金森	13
芹 川	50	合 計	1,000

(注) 金沢市立図書館河合文庫「能登縮明治十一年中産額并金額」による。

第6節 北海道の大麻

天然繊維の我が国における利用は、前節までに述べたように古代から2000年近く、大麻と苧麻が主であったが、近代では大麻と亜麻あまが対比される。この亜麻については後述する。

北海道における大麻栽培の史実として、札幌農学校における南(池田)鷹次郎の実験実習報告書がある。これによると、亜麻と大麻の栽培実習が正式の教課内容であったことが分かる。1892年(明治25年)の実習書には「七月上旬害虫発生のため繊維を採取するには適せず、種実を採るに留まった」とある。因みに道内江別市には大麻おひあさという地名すらある。

このように明治、大正、昭和と道内では第2次世界大戦前までは各地で大量に大麻は栽培されていた。ところが戦後、大麻の需要が極端に少なくなったことや、既述の法的規制などがからんで、道内の広大な地域に大麻が野生化したと考えられる。これを以後、道産野生大麻(以下単に野生大麻)と称す。

昭和40年の野生大麻はFig-8に示すように札幌を中心として、江差、夕張、北見、紋別、美幌、広尾などが密生地域とされていた。各保健所管内での抜取り総株数は昭和41年度5万本、42年14万本、43年38万本に達している。これら野生大麻中の、幻覚成分である Δ^9 -THC(Δ^9 -テトラヒドロカンナビノール)の含量は最高、網走地区で採取された雌株で1.6%を示しており、これで十分に幻覚作用の目的を達するものである。大体、雌葉0.2-1.6%、雄葉の0.1-1.1%、種子0-0.5%であり、地域差による成分の変動および雌雄間で大きな差異はないとの報告

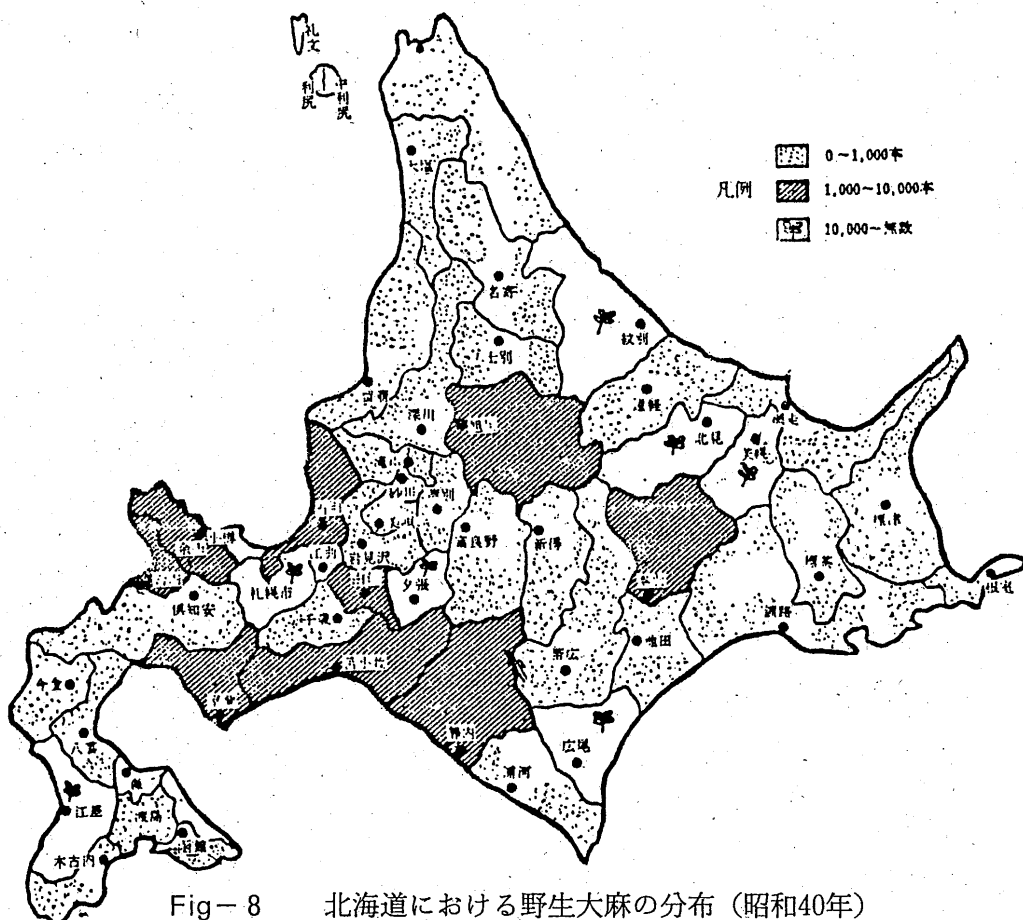


Fig-8 北海道における野生大麻の分布(昭和40年)

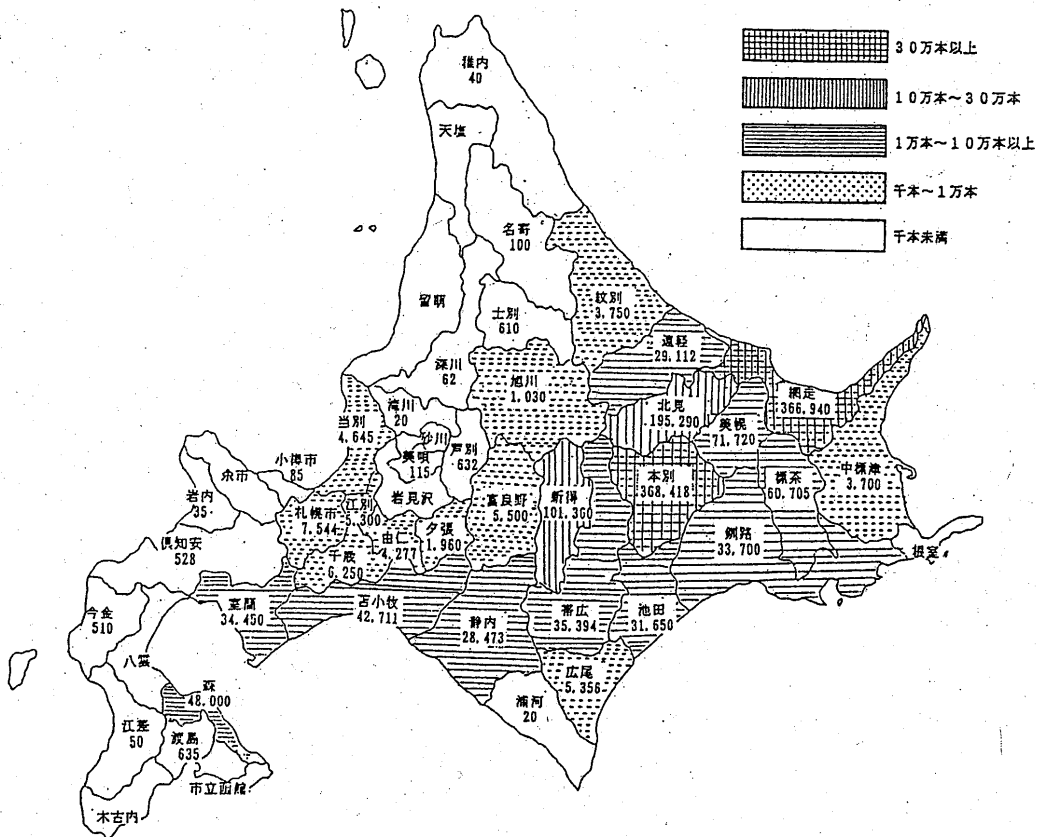


Fig-9 保健所別野生大麻除去実績図 (平成2年度)

がある¹⁰⁾。その後の調査では (Fig-9 及び Fig-12), 昭和56年度は560万本, 57年度670万本, 58年度850万と増加, 昭和58年にピークを記録している。しかし, その後は抜取りの効果が出たためか, 現在では150万本と激減してはいるものの, 昭和40年代の約4倍であり, いまだ予断を許さない状況にある。Fig-10及び11は道内における野生大麻の写真である。因みに全国における野生大麻の除去状況をTable-IIIに示すが, それでも北海道は平成元年度で88.0%, 平成2年度では86.9%を占め依然として全国の約9割で第一位であることに変わりない。このため, 本州への持込違反が後を断たない状況である。この原因として, 大麻の植性が冷涼な気候に適應すること, 広大な土地のため, 風・鳥獣による拡散, また監視の不行届などの条件が重なった結果と考えられる。平成2年度の道内保健所別野生大麻除去実績Fig-9によれば, 昭和40年度 (Fig-8) とは様相が異なり, 札幌, 江差地区は減少するものの, 網走, 本別は30万本以上と道央, 道北に野生化が移動している。「大麻取締法」という現実の中で「野生大麻」はどうなるのであろうか。北海道保健環境部の御苦労が推察される。



Fig-10 北海道野生大麻を抜取る保健所員

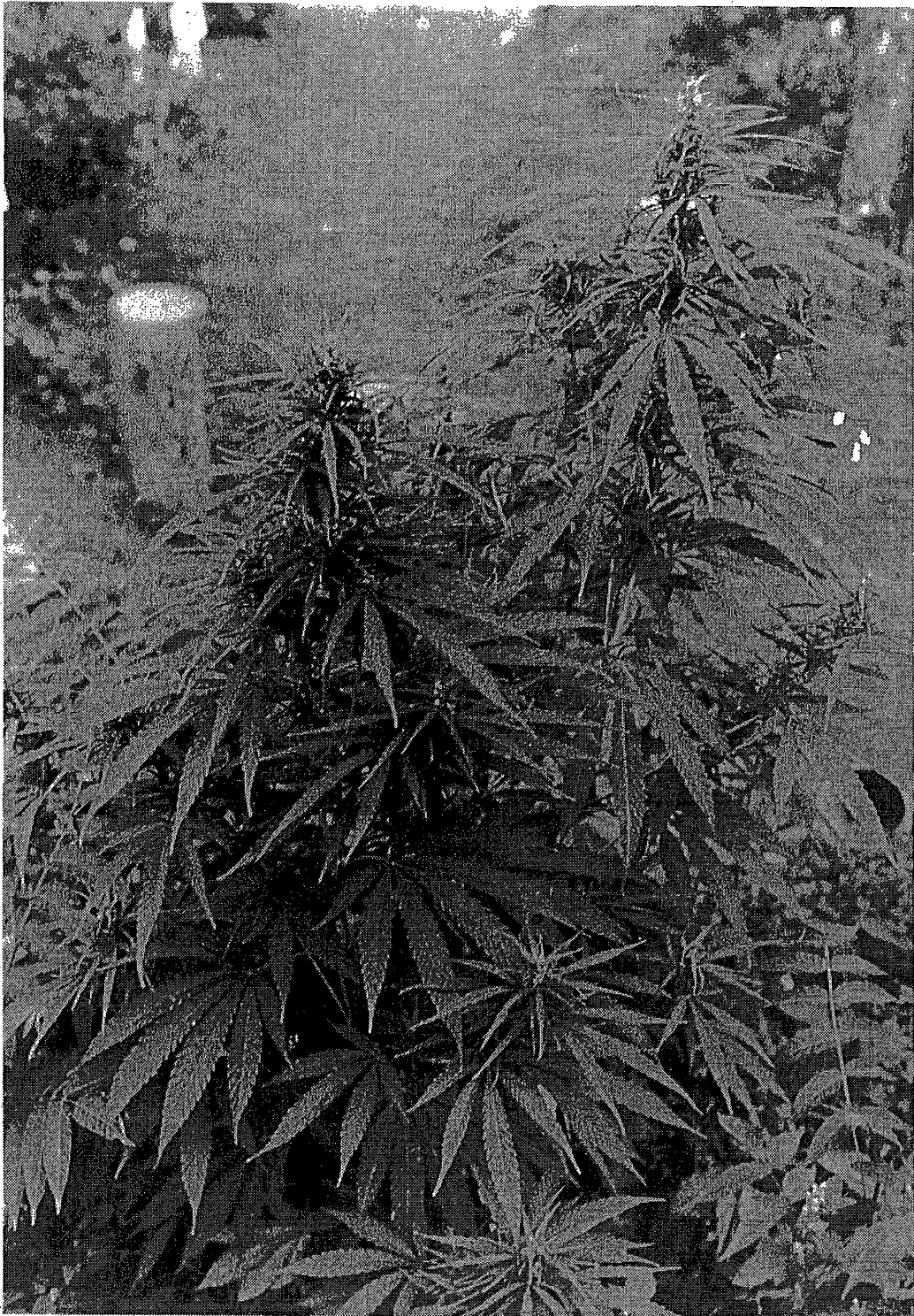


Fig-11 北海道野生大麻

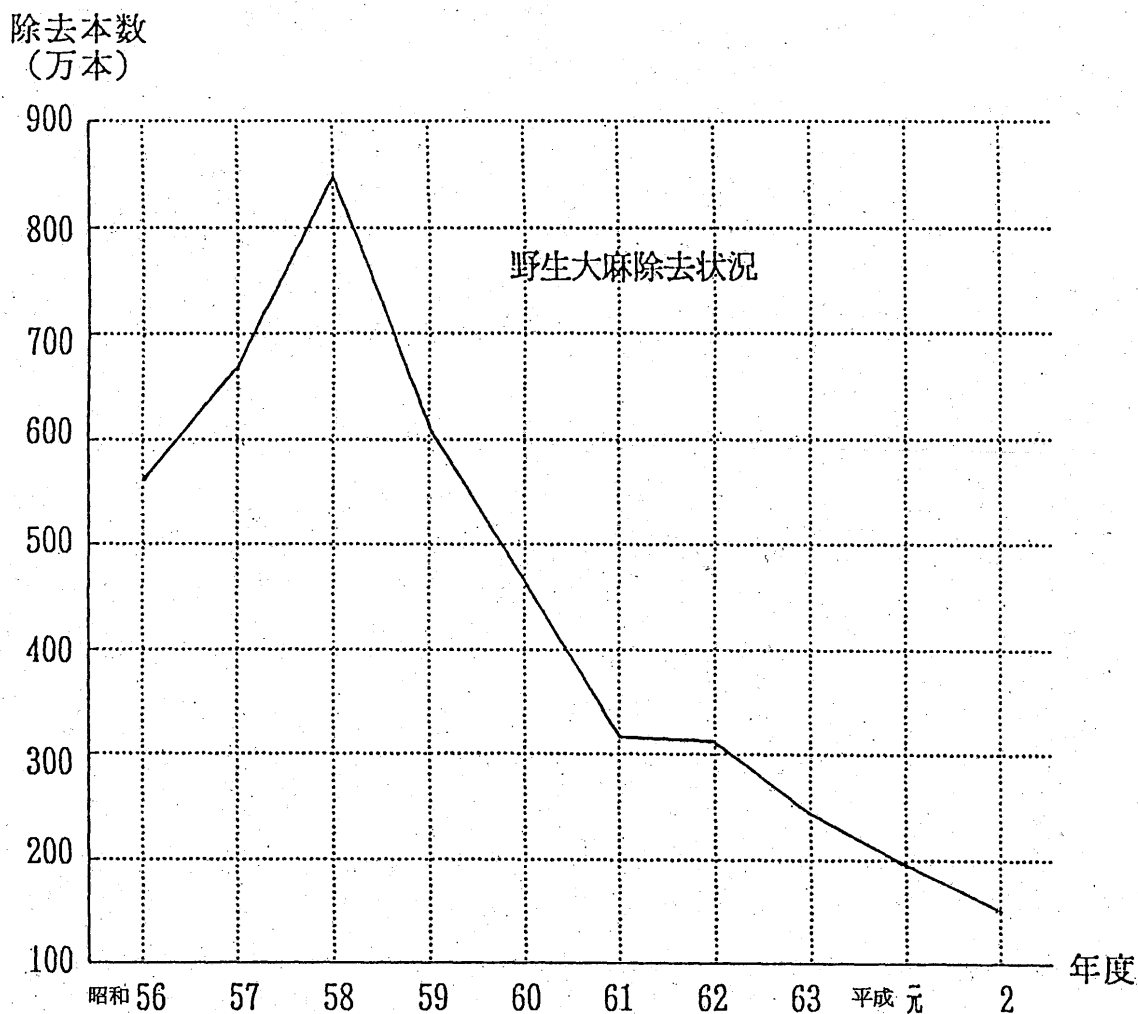


Fig-12 北海道内における野生大麻の除去状況

Table-III 全国における野生大麻の除去状況

年度別 順位	平成元年度		平成2年度	
	都道府県別	除去数	都道府県別	除去数
1	北海道	1,934,921 (本)	北海道	1,500,677 (本)
2	青森	198,770	青森	159,826
3	長野	26,185	長野	23,585
4	岩手	23,007	岩手	23,041
5	群馬	7,935	群馬	10,034
6	栃木	5,116	栃木	6,134
7	秋田	817	秋田	2,858
8	山梨	280	山梨	760
9	茨城	220	茨城	109
10	埼玉	184	埼玉	88
	その他	408	その他	75
計		2,197,843		1,727,287

謝 辞

本研究は渡辺和人助教授，松永民秀，木村敏行，小村晶子助手並びに恩師，吉村英敏教授（九州大学名誉教授，中村学園大学教授）ほか多くの協力者によって遂行され，又，現在もなお続行中のものである。ここに深謝する。さらに，北海道野生大麻の資料，写真等を心よく御提供頂いた，北海道保健環境部，業務課，並びに北海道立衛生研究所薬学部長，金島弘恭博士に厚く御礼申し上げる。

参考文献

- 1) 畑山 博, PHP No.516 p.89 (1991).
- 2) 山本郁男 「大麻文化科学考(その1)」北陸大学紀要 14, 1-15 (1990).
- 3) 石原道博, 和田清編訳, 「魏志倭人伝」岩波文庫 (1970).
- 4) 一戸良行「麻薬の科学—大麻草」p115 研成社 (1975).
- 5) 山本健吉編, 「日本詩歌集」平凡社 (1959).
- 6) 永原慶二, 「新・木綿以前のここと—苧麻から木綿へ」中公新書 (東京) (1990).
- 7) 日本古典文学体系, 「古事記, 日本書紀, 萬葉集」岩波書店 (1975).
- 8) 村上道太郎, 「着物・染と織の文化」新潮選書 新潮社 (東京) (1988).
- 9) 中薬大辞典, 第一巻 p.0615 小学館, 上海科学技術出版 昭和60年 (1985).
- 10) 世界大百科事典, 「大麻」p.169 平凡社 (1988).
- 11) 石川県立図書館蔵「民家検券図」. 北村良忠著 (?) 天保初年 (1829).
- 12) 山本郁男, 「大麻の幻覚作用」(総説) 一部改変 日本薬剤師会雑誌 37 1061~1071 (1985).
- 13) ピエール・チュイリエ, 高橋純訳「ニュートンと麻術師たち」工作舎 (東京) (1990).
- 14) 石川県羽咋市史「近世編」羽咋市史編さん委員会 北国新聞社, 昭和49年 (1974).
- 15) 石川県鹿島郡鹿島町史, 鹿島町史編さん専門委員会 北国新聞社, 昭和60年 (1985).
- 16) 清水隆久, 近世北陸農業史—加賀藩農書の研究— 農山漁村文化協会. (1987)
- 17) 橘高毅, 本間正一, 金島弘恭, 森三佐雄, 古賀有道, 西岡征四郎, 寿田幸喜, 北海道立衛生研究所報 第19集 p140~143 昭和44年 (1969).